巻頭言

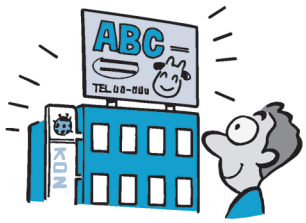
原点回帰

副理事長
原田　順一

最近、業界紙等でデジタルサイネージという単語が頻繁にみかけられるようになりました。LED、液晶、プラズマなどの画面に映像を映し出し、ニュース・お知らせ・広告などの静止画像をはじめ、動画の映像を放映する電子看板として媒体の役割を担い、数社の大手電機メーカーが事業化に乗りだしてきました。

駅前、繁華街に今まで大判広告が掲出されていた一角に、電子看板なる媒体が取り付けられ、賑々しく画面が移り変わり、静止画面・動画画像が放映される。この放映される画像づくり即ちコンテンツづくりは、果たしてサイン･看板業界の業務に取り込めるのか、甚だ疑問です。多分異業種のIT産業の範疇に入るであろうと察します。看板業界の役割は取付業務が精一杯なのではないか、取付も他業種からの参入も容易である。今までの看板の場所がその煽りで少しずつ狭められていく。

20数年前、カッティングマシンが登場し、看板業界に初めてコンピュータが導入され、革命的に普及した。10数年前にはインクジェット機が同じようなスピードで普及し、看板製作の方法が一変してしまった。今度は媒体の有様が大きく変化しようとしています。全てが変わってしまうとは思いませんが。

オフセット印刷業界、スクリーン印刷業界、サイン看板業界の態様は、業界による壁が低くなったといわれているが、現在は壁がなくなり業際は重なり合っているように見受けられます。スクリーン印刷業界では、インクジェット機の普及に危機感を持ってというよりもインクジェット機を取り込み普及率が50％を越え、インクジェット機を活かし始めている企業が増えています。オフセット印刷業界も虎視眈々と窺っています。

“100年に一度の金融危機”を迎え、色々と価値観が変わろうとしています。ビジネス・スタイル、システムが見直されています。この先どうすればよいのだろう?!サイン看板業界としても大きな課題を背負っています。誰もが、先が読みがたい時代になりました。ピンチはチャンス、この際思い切って原点に戻り、サイン看板業界の枠をはずし、広告という大きな枠で考えてみようと思います。